

栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	京都府
再委託先	福知山市

1 事業推進の体制

実践中心校	福知山市立日新中学校 福知山市立惇明小学校
協力校	福知山市立大江中学校 福知山市立庵我小学校
関係機関	福知山市学校給食センター

2 具体的な取組等について

テーマ1	小・中学校における発達段階に応じた系統的、計画的な食に関する指導
評価指標	給食の残量状況 アンケートの実施
効果	食事の重要性を理解し、残食は極めて少なく、給食を生きた教材としながら好ましい食習慣を意識する生徒が増えた。

(取組状況)

【中学校における食育の推進】

- ・生徒の自主性を引き出すことを意図した給食の時間における指導を進めた。
- ・毎月1回朝学活（または終学活）の時間に、学級担任による食に関する指導を実施した。（栄養教諭が作成した資料活用）
- ・食育の掲示資料を作成し、生徒の日常生活の活性化を支援した。
- ・学校歯科医による1年生対象の食育授業の内容を、生徒会の各委員会と連携をしながら全校に発信し、「日新噛むカムタイム」につなげた。（保健委員が取組の主旨と噛むことの効能を啓発し、広報委員が毎日の給食の時間帯の中で2～3分イメージソングを流す。）
- ・保健委員の生徒による啓発により、牛乳飲用触発の「牛乳飲も飲もキャンペーン」を展開した。
- ・他校での先行授業を参考に、学校給食を生きた教材として活用し、生徒主体の展開となるよう再検討した教材で、食育授業を実施した。

《1年》 自らの食力で未来を切り拓け！～初級コース～

「中学生期にふさわしい食生活をおくろう！」

《2年》 自らの食力で未来を切り拓け！～中級コース～

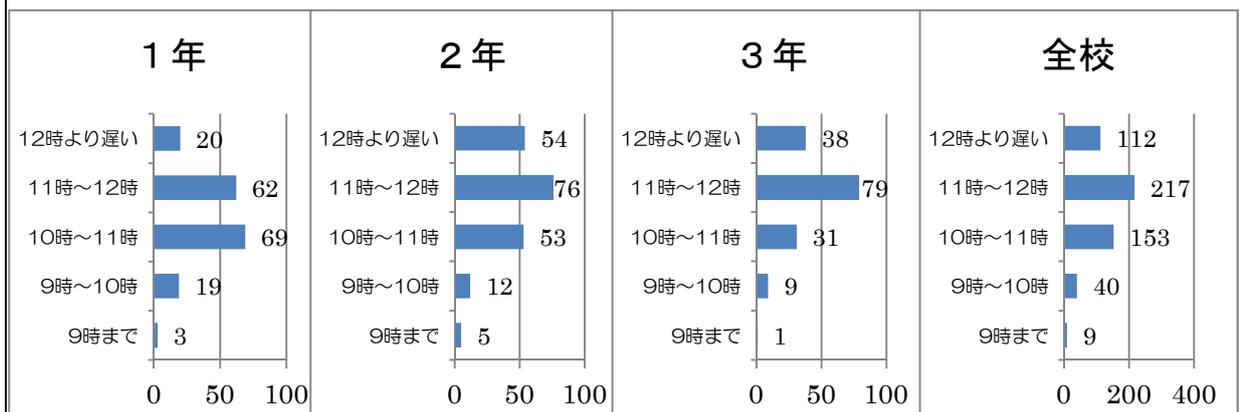
「健康志向で、食品表示に着目しよう！」

《3年》 自らの食力で未来を切り拓け！～上級コース～

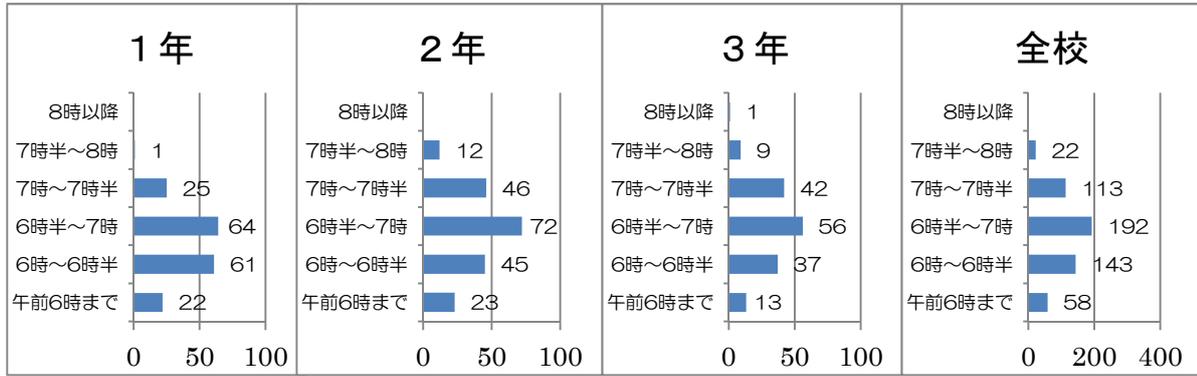
「脳力アップ大作戦を展開しよう！～食育編～」

- ・食生活実態調査を実施した。

「学校のある日、夜何時に寝ていますか。」

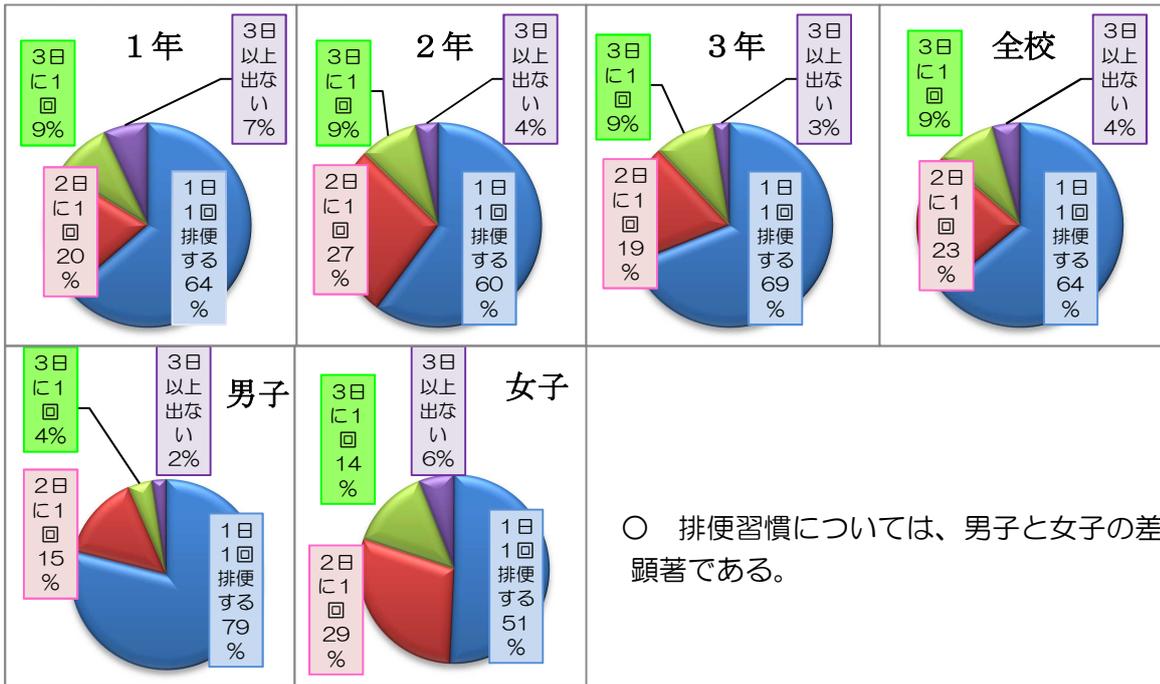


「学校のある日、朝何時に起きていますか。」



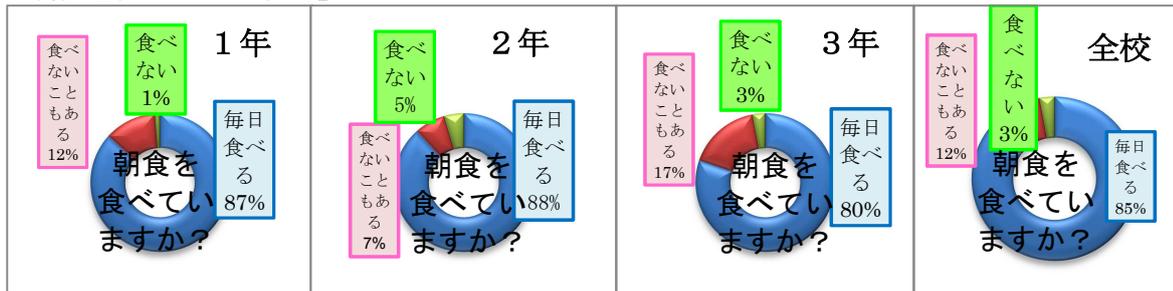
○ 夜11時以降に就寝する生徒が半数以上（64%）で、遅寝の傾向にある。

「毎日排便がありますか？」

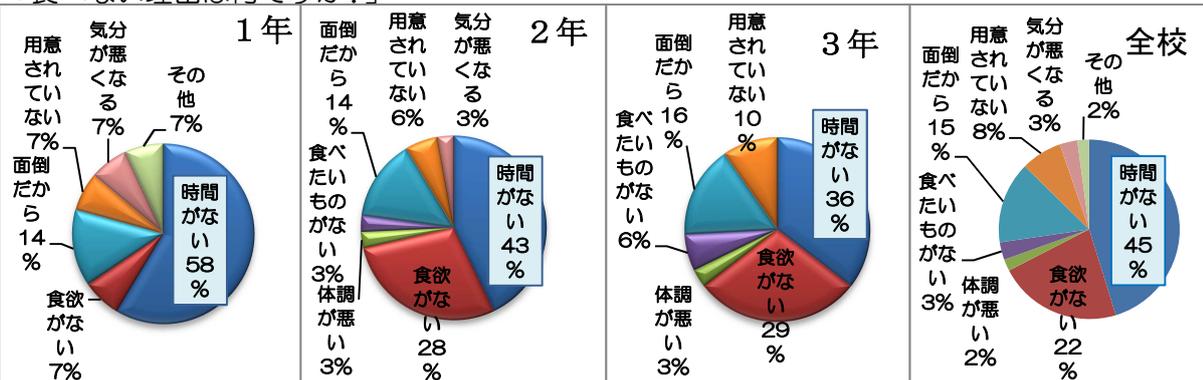


○ 排便習慣については、男子と女子の差が顕著である。

「朝食を食べていますか？」

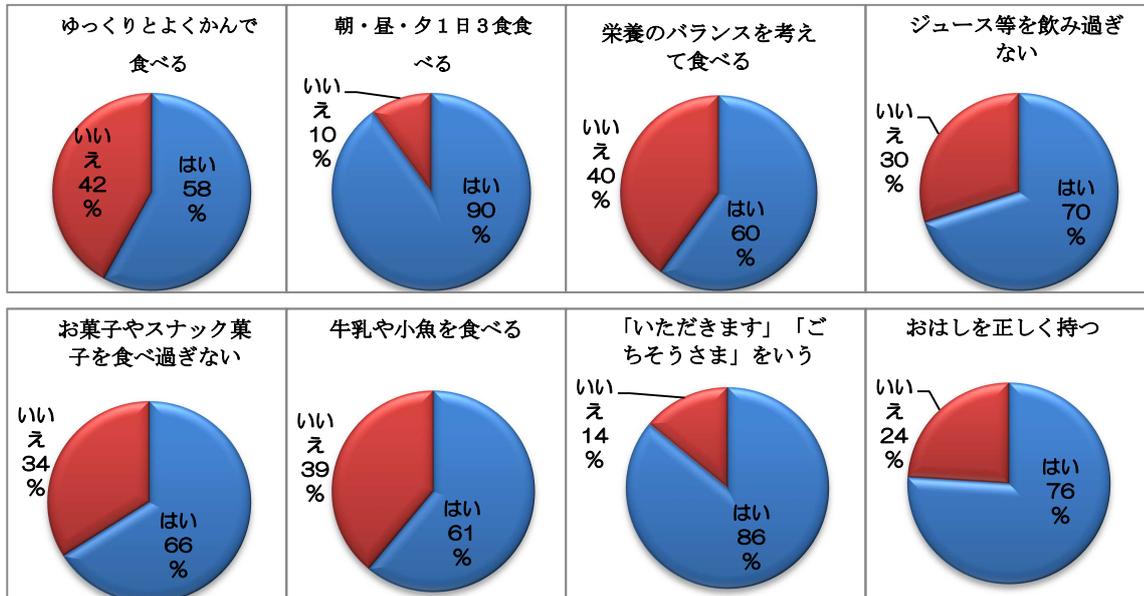


「食べない理由は何ですか？」



- 朝食欠食率は3%で、ほとんどの生徒が朝食をとる習慣がついている。
- 朝食を食べない理由では、「時間がない」「食欲がない」と答えている生徒が多く、「早寝」「早起き」等生活習慣を見直すことで摂食率の改善が期待できる。

「食事のとき、次のようなことに気をつけていますか。」



- 食事の時、半数以上の生徒が栄養面やマナー面について意識しながら食べているが、食育の成果としてとりあげていくためには、「栄養のバランスを考えて食べている」「牛乳や小魚を食べる」等、食事内容を意識させることが必要である。

テーマ2	学校給食での食物アレルギー対応の検討
評価指標	市内全小中学校での有効活用
効果	食物アレルギー対応時の課題とその解決に向けて取り組むことができた。
(取組状況)	
<p>【学校給食における食物アレルギー対応マニュアルの検討と作成】</p> <p>福知山市食物アレルギー対応検討委員会を組織し、食物アレルギー対応のための基本的な手順のほか、学校生活での対応、教職員の役割、緊急時対応の図式などについて検討を重ね、対応マニュアルの作成を行った。また、アレルギーのある児童生徒の把握方法及び関係機関との情報共有についても検討を行うとともに、教職員を対象とした食物アレルギー対応の研修会を行った。</p>	

3 事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- ・食物アレルギー対応マニュアルを活用した児童生徒への対応をすることができる。
- ・食に関する全ての取組にわたり、栄養教諭を中核とし、詳細に共通理解を図りながら進め、学校・家庭・地域の食への関心を高めることができた。
- ・給食当番活動、委員会活動等において生徒主体となる取組となるよう工夫したことで、生徒の自主性を引き出すことができた。
- ・実践にあたり、教師側、生徒側ともに組織的に進めたことで、食育を学校教育活動の一環とし

て位置づけることができた。

- 学校給食センターから提供される生きた教材である学校給食や広報紙等、食育の資料により、地域の食材への理解を深めることができた。
- 学校給食献立を教材とした食育授業の工夫により、児童生徒は学校給食を栄養バランスのよい食事の手本として意識しながら学ぶことができた。
- 実践中心校での取組をブロック内の小学校や市内の他中学校に発信し、連携を図ることができた。

4 今後の課題（今回の事業により新たに見えた課題など）

- より適切な食物アレルギーへの対応を図るためには、常に新しい情報を取り入れる必要がある。
- 関連教科等と関連付けた食育を進めるためには、教科担任教諭等との連絡調整の時間確保が必要である。
- 食生活実態調査により、生徒の食事内容の充実を図ることで食育のさらなる充実推進が期待できることが明らかになった。来年度以降、朝食を中心に取組を進めていく予定である。